

# モトゥナ語における Ci/Cu 音節の短縮化\*

大西 正幸

## 1 序

本論は、モトゥナ語において、Ci/Cu 音節が一定の形態音韻的環境においてコーダ子音と交替する現象を扱う。下に挙げるような現象である。

- (1) a. *o-ng*  
PROX-M  
「この男 / これ / この人たち大勢」<sup>1</sup>
- b. *o-nu-nno*  
PROX-M-COMIT  
「この男 / これ / この人たち大勢と一緒に」
- (2) a. *ro-omah*  
2KINPOSS-sister.in.law  
「あなたの義姉妹」
- b. *ro-omasi-ng*  
2KINPOSS-sister.in.law-NSG  
「あなたの義姉妹たち」
- (3) a. *ti-wa'*  
DIST-CL:time/word  
「その時 / 言葉」
- b. *tumika-watu-ng*  
first-CL:time/word-M  
「最初の時 / 言葉」

---

\* 本論は、マックスプランク研究所(ライプツィヒ)の言語学部門で2006年に行った‘CV Reduction in Motuna’という題のセミナー発表を発展させたものである。この発表にあたり、さまざまな形でアドバイスをしてくれた Juliette Blevins と、セミナーに参加してくれた言語学部門のメンバー、とりわけ、有意義なコメントをしてくれた、Bernard Comrie, Martin Haspelmath に感謝する。また、本論で用いられる南ブーゲンヴィル諸語のデータのフィールド調査については、文部科学省科学研究費基盤研究(B)「パプア諸語の比較言語学的研究 — 南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象として」(研究代表者：大西正幸、課題番号：20320065)の援助を受けている。中でも、モトゥナ語のデータおよびその分析については、著者の長年の研究協力者である、Therese Minitong Kemelfield さんと Dora Leslie さんに、ナーシオイ語のデータについては William Takaku さんに、バイツイ語のデータについては Lydia Maniako さんと Rebecca Maniako さんに、おもにご教示いただいた。また、本稿を完成するにあたり、言語記述研究会の皆さん、とりわけ稲垣和也さんと千田俊太郎さんから、有意義なコメントをいただいた。心から感謝する。もちろん本論でのデータの扱いや分析については、筆者がすべての責任を負っている。なお、本論中に用いられる略号については、本論の末尾を参照のこと。

<sup>1</sup> モトゥナ語には、男 / 女 / 場所 / 指小の4つを区別する、「性」のパラダイムがある。すべての名詞は、このどれかの範疇に属し、接尾辞によって文法的一致を示す。M「男性」の接尾辞は、男性の生物名詞だけでなく、無生物を表す(中性)名詞や、大複数を表す名詞をも標示する。

(1) では /ng/ と /nu/ が、(2) では /h/ と /si/ が、(3) では /ʔ/ (声門閉鎖音素) と /tu/ が交替している。このような交替における、前者三種類のコーダ子音を、coda consonants の略で、Cc と呼ぶことにする。

手順としては、まずこの形態音韻現象を共時的に記述したあと、その一般化について考察し、さらにはその歴史的起源にまで考察を広げることにする。この交替は、共時的には、いちおう両方向に考えられるので、中立的に「交替」と言った方がいいかもしれないが、本論では、「短縮化」という用語でこの形態音韻現象を一般化するとともに、この現象の基底となる音韻変化の、歴史的起源を指し示したい。その理由は議論が進むにつれて明らかになるはずである。なお、音韻現象のこのような扱いについては、Blevins (2004) に負うところが大きい。Blevins (2004) の方法論については、3.3 で触れることにする。

モトゥナ語はパプア・ニューギニアのブーゲンヴィル島南部で話される、パプア諸語、ないし非アウストロネシア諸語として分類される言語の一つである。周辺のいくつかの言語ないし方言との間の歴史的類縁関係が明らかなため、これらの言語ないし方言は、Ross (2001) により、南ブーゲンヴィル語族と命名された。私もこの命名に従う。南ブーゲンヴィル語族に属する言語・方言群は下の通り。(位置関係については、地図 1 を参照。)

モトゥナ語 (2 つの方言)

バイツィ語

ナゴヴィシ・シベ語 (少なくとも 4 つの方言)<sup>2</sup>

ナーシオイ語 (8 つの方言)<sup>3</sup>

ブイン語 (5 つの方言)<sup>4</sup>

ウイサイ語

この言語・方言の分類は暫定的である。Ross (2001), Dunn *et al.* (2002), Evans (2010) などの最近の研究では、モトゥナ語、ナゴヴィシ (・シベ) 語、ナーシオイ語、ブイン語を主要 4 言語とし、ウイサイ語はブイン語の方言として扱っている。バイツィ語については特に記述がない。SIL (Summer Institute of Linguistics、夏期言語学協会) の言語学者たちは、ウイサイ語とバイツィ語を、言語 / 方言という観点からは中間的なもの (SIL の用語では ‘sublanguage’) として扱っている。



図 1 南ブーゲンヴィル語族

<sup>2</sup> この呼称および方言分類は稲垣 (2010, 本論集所収) に従う。

<sup>3</sup> Hurd & Hurd (1966) に従う。なお、Hurd は、Hurd & Hurd (1966), Hurd & Hurd (1970), Hurd (1977) などの過去の文献では短母音で表記していた最初の音節「ナ」を、Hurd (2003), Hurd & Hurd (2009 (1970)) などの最近の文献ではナーシオイ (Naasioi) と長母音で表記している。音韻的にはこの方が正しい。

<sup>4</sup> テレイ語、ルガラ語などの名称もあるが、話者の間でコンセンサスがないため、とりあえず、Laycock (2003) に従い、この呼称を用いる。なお、方言分類 (ウイサイ語を除く) も、Laycock (2003) に基づいている。

私にも、これ以上精密な分類を行うに十分なデータがあるわけではない。ただ、今回（2009年8月）のフィールド調査で、バイツィ語の基礎語彙のデータがある程度得ることができたが、音韻的には、まさにモトゥナ語とナゴヴィシ・シベ語のちょうど中間的な性格を持っていることが確認できた。<sup>5</sup> また、ウイサイ語は、ブイン語の他の方言とはかなり異なった特徴を持っていると言われている。（Laycock (2003) 参照。また SIL は、ブイン、ウイサイの話者のために、別々の識字教育用の教科書を作成している。）こうした理由から、ここでは、暫定的に、個別の言語として扱っておく。

2000年の地域別人口統計 (Office 2002) に基づき、村落名をてがかりに、現地出身の研究協力者と各言語の話者人口を大まかに推定したところ、モトゥナ語とバイツィ語が併せて 16,000 人、ナゴヴィシ・シベ語が 12,000 人、ナーシオイ語が 22,000 人、ブイン語とウイサイ語が併せて 27,000 人、という数字を得た。

本論では、テーマが形態音韻論に限られているので、この語族の言語の統語的な特徴については特に触れない。ただ、限定的な文法格標示はあるものの、基本的には動詞に中核名詞句の人称と数が標示される、主要部標示の傾向が強い言語グループであることは断っておきたい。音韻的な特徴としては、5-7 の母音音素<sup>6</sup>と比較的少数の子音音素を持ち、音節構造も CV を基本とした単純なものが多いこと。名詞類 / 動詞ともに、形態論的にはきわめて複雑であるが、膠着的な傾向が強いこと。名詞類には、言語によって異なる程度に文法化された性と類別詞による範疇分けがあること。格組織は、限定的に、いわゆる能格絶対格型の対立を持つこと。動詞のパラダイムに、中動相と他動相の対立（いわゆる diathesis）があること。また自動詞に動作自動詞 (active verbs)、中動自動詞 (middle verbs) の区別があること、などである。

## 2 モトゥナ語の音韻体系

### 2.1 音素

まず、モトゥナ語の音素をあげる。

表 1 モトゥナ語の子音音素

	両唇音 (labial)	舌頂音 (coronal)	舌背音 (dorsal)	喉頭音 (laryngeal)
閉鎖音 (stops)	p	t	k	' [ʔ]
鼻音 (nasals)	m	n	ng [ŋ]	
摩擦音 (fricatives)		s		h
r 音 (rhotic)		r [ɾ, d, ɹ]		
わたり音 (glides)	w [w, β]		y [j]	

表 2 モトゥナ語の母音音素

	前舌 (front)	中舌 (central)	後舌 (back)
高段 (high)	i		u
中段 (mid)	e		o
低段 (low)		a	

<sup>5</sup> たとえば、バイツィ語には、ナゴヴィシ・シベ語の音素 /p/ がモトゥナ語音素 /h/ に変化する中間過程を示す、音素 /ɸ/ が存在する。その他の例については、本論 4.1 を参照。

<sup>6</sup> どの言語も基本的には 5 母音。ただ、ナゴヴィシ・シベ語は 7 つの長母音を持ち（稲垣 2010, 本論集所収）、バイツィ語にはおそらく長母音が 6 つある。

## 2.2 モーラ

モトゥナ語はモーラ言語である。少なくとも次の3つの点で、モーラは重要な役割を果たす。

(A) 音韻語の最小単位は2モーラである。

たとえば、遠称指示詞の女性形と場所性形は、道具格を表す接尾辞 /-ki/ のついた表層形がそれぞれ /tii-ngi/, /ti-ki/ であることから、基底形をそれぞれ /tii/ ‘DIST.F’, /ti/ ‘DIST.L’ と指定するが、その無標の名前格 (Nominative) 形は、上の規則により、どちらも /tii/ と、2モーラとして現れる。

(B) ピッチアクセントが語末から数えて3モーラ目にある(3モーラ目から2モーラ目にかけてピッチが急激に下降する)。

下の例を参照。

(4) a. *miínong*

「私(男)は行くところだ」

b. *míina*

「私(女)は行くところだ」

(5) a. *hónna*

「大きい」

b. *poínaa*

「多い」

(C) 部分重複は、もとの語の最初の2モーラを前接する。<sup>7</sup>

下の例を参照。

(6) a. *toko=tokoh-ah* 「暑い」

b. *taa=taapu* 「助け合い」

c. *peh=pehkita* 「とても小さい」

## 2.3 音節

モトゥナ語の音節構造は次の通り。

(A) 音節初頭子音はモーラに数えない。

初頭子音 Co には、/ʔ/を除きすべての子音がなりうる。初頭子音なしの音節は語中では稀である。初頭子音が二つ以上立つことはない。

(B) 韻 (rhyme) の各要素はモーラに数えられる。

中核母音は、短母音 (V) または長母音 (VV)。音節末要素は、コーダ母音 (Vc) の /i/ または /u/、あるいはコーダ子音 (Cc) の /h/, /ʔ/, または鼻音。このコーダ鼻音を /Nc/ で表すことにする。/Nc/ は、語末では /ŋg/、語中では後続の子音と同調音位置の鼻音音素である。

音節のいくつかの例を挙げる。

<sup>7</sup> 動詞や親族名称につく、数を標示する後接辞が、1モーラの重複を行う場合がある。3.1 の (17b) を参照。

- (7) a. *a.na*  
       「これ（女性形）」  
       b. *mii.yoo*  
       「塩」  
       c. *Siu.wai*  
       「シウワイ（地域名）」  
       d. *eh.kong*  
       「今」  
       e. *kaah.waang*  
       「彼らは彼／彼女を葬った」

(7a) は (Co)V (1 モーラ) (7b) は CoVV (2 モーラ) (7c) は CoVVc (2 モーラ) (7d) は (Co)VCc (2 モーラ) (7e) は CoVVcC (3 モーラ) の例である。

### 3 Ci/Cu 音節と Cc 交替の共時的記述

本論で扱う Ci/Cu 音節と Cc の交替現象は、共時的には、とりあえず、名詞類（名詞、形容詞、類別詞を含む）動詞の 2 つの領域に分けて記述した方がよさそうである。（ただし、下に述べるように、名詞類の中でも親族名称は中間的な振舞いを見せる。）以下、この二つの領域を別々に取り上げたあと、3.3 で、全体をもう一度見渡して、一般化を試みることにする。

#### 3.1 名詞類

まず、次の例を見てみよう。(a) は名詞ないし類別詞（と指示詞の組み合わせ）が無標の名前格 (Nominative) で現れた場合、(b), (c) はそれに格ないし性を表す接尾辞がついた場合である。（(10a, b) は (3a, b) の再掲。）

- (8) a. *o-ng*        *nungamong*  
       PROX-M    male.person  
       「この男の人」  
       b. *o-ng-ngi*        *nungamong* ~ *nungamong-ngi* <sup>8</sup>  
       PROX-M-INST    male.person    male.person-INST  
       「この男の人によって」  
       c. *o-nu-nno*        *nungamong* ~ *nungamonu-nno*  
       PROX-M-COMIT    male.person    male.person-COMIT  
       「この男の人と一緒に」
- (9) a. *Aanih*  
       ‘female.name’  
       「アーニヒ（女性名）」

<sup>8</sup> 指示詞で名詞句の格を明示した場合は、名詞句内の他の要素、特に中核名詞に格接辞をつけるか否かは随意的であり、格接辞のついた形は強調形である。(8c) も同様。

b. *Aanih-ki*

‘female.name’-INST

「アーニヒ（女性名）によって」

c. *Aanisi-nno*

‘female.name’-COMIT

「アーニヒと一緒に」

(10) a. *ti-wa’*

DIST-CL:time/word

「その時 / 言葉」

b. *tumika-watu-ng*

first-CL:time/word-M

「最初の時 / 言葉」

ここに挙げた名詞 / 類別詞 / 指示詞は、無標の場合 ( (8a), (9a), (10a) ) や CV 音節が後続する場合 ( (8b), (9b) ) 即ち音節境界の前では、語末が Cc で終わっているが、Cc で始まる要素が後接された時 ( (8c), (9c), (10b) ) Ci/Cu 音節が現れる。それぞれの Cc と交替する Ci/Cu 音節は、次のように定まっている : /ng/ ↔ /nu/, /h/ ↔ /si/, /’/ ↔ /tu/。

この現象については、少なくとも二つの分析の仕方が可能であろう。

まずは、これらの名詞 / 類別詞 / 指示詞が基底形として Ci/Cu の形を持ち、それが音節境界の前では Cc として現れる、という分析。これを定式化すると、

(11) /nu/            /Nc/  
      /si/     →    /h/     /    V\_\_\$  
      /tu/            /’/

もう一つは、Cc で終わる形を基底形と見なし、Cc で始まる要素が後接した場合、その子音をコードとする新たな音節を形成しなければならないため、次のような音韻的な交替が起きる、と記述する。

(12) /Nc/            /nu/  
      /h/     →    /si/     /    \_\_#-Cc  
      /’/            /tu/

(12) の分析の利点は、モトゥナ語には無標でも /nu/, /si/, /tu/ を語末に持つ名詞が存在する、という点である。これらの名詞が Cc によって後接された場合 ( (13b), (14b), (15b) )、もちろんこれらの Ci/Cu 音節は保たれる。<sup>9</sup>

(13) a. *soukenu*

crane

「鶴」

<sup>9</sup> このうち (14) については (19) の議論を参照。

- b. *soukenu-nno kuuruu-nno*  
 crane-COMIT owl-COMIT  
 「鶴や梟と」

- (14) a. *pa-masi*  
 3KINPOSS-sister.in.law  
 「彼女の義姉妹」  
 b. *pa-masi-ng*  
 3KINPOSS-sister.in.law-NSG  
 「彼女の義姉妹たち」

- (15) a. *nimautu*  
 handsome.man  
 「美男」  
 b. *nimautu-nno niraweru-nno*  
 handsome.man-COMIT handsome.woman-COMIT  
 「美男や美女と」

もし、(11)のように、(8)–(10)の名詞／指示詞／類別詞の基底形を /-nu/, /-si/, /-tu/ で終わる形に措定するとすれば、なぜこれらだけが Cc と交替し、(13)–(15) では交替しないのかを、説明しなければならない。

逆に、(12)の分析の問題点は、この変化が音声／音韻的に説明できない点である。この点、(11)の方が、後に述べるように、弱化 (lenition) や音消失 (syncope) といった、類型的に見て一般的な自然音韻変化によって説明できる。

ところで、親族名称のパラダイムの中に、これとは違ったタイプの交替が見られる。(親族名称は、所有者を表す前接代名詞と被所有者を表す語幹を必須要素とし、さらに、場合によっては性／数を表す接尾辞を伴う。)

- (16) a. *pa-an-na*  
 3KINPOSS-opp.sex.sib's.child-F  
 「彼／彼女の姪」  
 b. *pa-apu-ng*  
 3KINPOSS-opp.sex.sib's.child-M  
 「彼／彼女の甥」

- (17) a. *nee-'-kino*  
 1INCKINPOSS-child-DU  
 「私たちの二人の子供たち」  
 b. *nee-ri-ri-'*  
 1INCKINPOSS-child-child-PCL  
 「私たちの三人以上の子供たち」

(16) においては、「異性の兄弟姉妹の子供」という意味の語幹が /an/~/apu/ の交替を起こし、(17) においては、「～の子供」という意味の語幹が /'~/ri/ の交替を起こしている。(17b) は、大小複数を表す接尾辞 /-'/ が続くので、直前の語幹が /ri/ の形で現れ、それがさらに重複を起こして /ri-ri/ となったのである。) これらの場合、(12) の規則では (15b), (16b) に出てくる /pu/, /ri/ を予測できないので、(11) の規則に /pu/, /ri/ を加え、基底形の Ci/Cu が、音節境界前に短縮化を起こしたと見るのが妥当であろう。つまりこれを定式化するとこうなる。

- (18) /nu/, /pu/            /Nc/  
       /si/                → /h/     /    V\_\_\$  
       /tu/, /ri/           /'/'

では、同じく親族名称である次の例はどうか。

- (19) a. *ro-omah* ~ *ra-masi*  
       2KINPOSS-sister.in.law  
       「あなたの義姉妹」  
       b. *ro-omasi-ng*  
       2KINPOSS-sister.in.law-PCL  
       「あなたの義姉妹たち」  
       c. *nee-na-mah-ro*  
       1INCKINPOSS-LINK-sisters.in.law-DU  
       「私たち二人、義姉妹たち」

「義姉妹」を表す語幹は、(19a) のように、2 人称単数が所有者の場合は、/-(o)mah/, /-masi/ の二つの形が共存している。一方、(19c) のように、非単数の所有者の場合は、/mah/ の形のみをとるし、(14a) で見たように、3 人称単数所有者の場合は、/masi/ の形しかない。後に 4.1 で述べるように、このような異形態の共存は、進行中の音韻変化 /si/ > /h/ を共時的に反映したものである。ここで、(19b) にある /-omasi/ を (19a) の /-omah/ の交替形と見なした時、形式上は (12) でも (18) でも説明可能であるが、(18) の説明の方が歴史的変化を忠実に反映していると言える。

そもそも、名詞類に関わる拘束形態素の中で、Ci/Cu と Cc の交替が起きる例はどれだけあるか。以下、今までに分かっているものをすべて挙げてみる。

表 3 Ci/Cu ↔ Cc 交替を起こす形態素 (1)

(i) 性 / 数を表す接尾辞

	意味 / 範疇	__#-Cc	V__\$
a.	M (男性、中性または大複数) NSG (非単数) PCL (大小複数)	-nu	-Nc
b.	PCL (大小複数)	-tu	-'

(ii) 動詞語幹から分詞を派生する語尾

	意味 / 範疇	__#-Cc	V__\$
	PARTIC (分詞)	-wasi	-wah



表3 Ci/Cu ↔ Cc 交替を起こす形態素(1)(続き)

## (iii) 親族名称の語幹

	意味 / 範疇	__#-Cc	V__\$
a.	child 「～の子供」	-(o)ri	-(o)'
b.	opp.sex.sib's child 「反対の性の兄弟姉妹の子供」	-(a)pu	-(a)Nc
c.	sister.in.law 「義姉妹」	-(o)masi	-(o)mah
d.	clanmate 「同じクランのメンバー」	-motu	-mo'

性 / 数を表す接尾辞のうち、(i)(a) の /-nu/~/ -Nc/ は、注1 で述べたように、性のパラダイムの中では男性 / 中性名詞や大複数の名詞と一致する。また、親族名称や類別詞の語尾としては、語彙によって非単数を表したり、大小複数を表したりする。(i)(b) の /-tu/~/ -'/ も、同じく、特定の親族名称の語尾として、大小複数を表す。

なお、親族名称の最後に挙げた、/-motu/~/ -mo'/ は、前者の形を避ける傾向があるようである。この他、類別詞の語幹の中にも Cc で終わるもののがかなりあるが、Ci/Cu との交替が確認できたのは (10) の /-watu/~/ -wa'/ だけである。

(8) に挙げた近称の指示詞 /o-nu/~/ o-ng/ は、指示詞語幹 /o-/ に (i)(a) の性 / 数を表す接辞 /-nu/~/ -Nc/ がついたものである。また、名詞の /nungamonu/~/ nungamong/ の末尾の /nu/~/ ng/ も、同じ接辞が男性名詞の語尾として転用されたものと解釈することができる。

ところで、名詞類の中で、自立名詞や類別詞の語末の Cc が Ci/Cu と交替を起こす例は、実際には頻繁には見られない。たとえば、Cc ではじまる格接辞は、(8c) で見たように、同じ名詞句の中の指示詞だけにつければ十分なので、必ずしもこれらの名詞 / 類別詞につける必要はない。また、Cc と交替する Ci/Cu の分布を見ても、/ng/ ↔ /nu/, /h/ ↔ /si/, /'/ ↔ /tu/ に限られている。一方、Cc で終わる親族名称の拘束語幹の場合、交替を起こす Ci/Cu 音節の種類に幅がある上、交替が義務的で、使われる頻度もきわめて高い。だから、(18) のような、これらの拘束形態素について当てはまる短縮化の規則を一般則と見て、自立名詞の短縮化を特殊な場合と考えた方がよさそうである。この考察を、次の動詞における例で、さらに進めてみる。

## 3.2 動詞

下の三つの例は、いずれも動詞の変化形における短縮化の例である。

(20) a. *taapu-m-u-u-ng*

help-1U-3A-RMPAST-M

「彼 / 彼女が私を助けた」

b. *taapu-m-u-ku*

help-1U-3A-DYN:PFV:DS

「彼 / 彼女が私を助けて、(彼 / 彼女以外の人が)、、、」

c. *taapu-ng-ku*

help-1U:3A-DYN:PFV:DS

「彼 / 彼女が私を助けて、(彼 / 彼女以外の人が)、、、」

- (21) a. *aat-os-i-ng*  
 sleep-1SACT-NRPAST-M  
 「私（男）は寝た」
- b. *aat-oh-na*  
 sleep-1SACT:NRPAST-F  
 「私（女）は寝た」
- c. *aat-oh*  
 sleep-1SACT:STAT:IMPF  
 「私は寝たまま、（私は）、、、」

- (22) a. *poku'-ro*  
 hide:3U:3A-DYN:PFV(:SS)  
 「彼／彼女が彼／彼女を隠して、（その同じ人が）、、、」
- b. *po'k-∅-u-ro*  
 hide-3U-3A-DYN:PFV(:SS)  
 「彼／彼女が彼／彼女を隠して、（その同じ人が）、、、」

(20a) では、1 人称の被行為者を表す接尾辞 /-m/ と 3 人称の行為者を表す接尾辞 /-u/ の組み合わせである /mu/ が現れているが、それが (20b), (20c) のように、CV の前では、随意的に /Nc/ と交替することができる。(21a) では、動作自動詞 /aat-/ の 1 人称主語を表す接尾辞 /-os/ と近過去を表す接尾辞 /-i/ の組み合わせである /-osi/ の /si/ 音節が現れているが、それが (21b), (21c) では Cc の /h/ に義務的に交替する。また (22) では、他動詞語幹 /pokuk-/、3 人称の被行為者（無標）3 人称の行為者を表す接尾辞 /-u/ の組み合わせである /pokuku/ の二つ目の /ku/ 音節が (22a) で、また最初の /ku/ 音節が (22b) で、それぞれ Cc の /' / に交替している。これらのいずれの場合も、Cc 形から Ci/Cu 形を予測できないため、交替を短縮化と見なさなければならない。(20b), (20c) や (22a), (22b) のように交替が随意的であったり、動詞語幹によって交替するしないの語彙的制約があったり、といった問題をひとまず置くとすれば、この短縮化は規則的であり、しかも、名詞に比べてはるかに、交替する Ci/Cu 音節が多様である。これを形態音韻的な規則として、(18) のような規則を広げることで、一般化できるであろうか？

その一般化を試みる前に、まず、モトゥナ語の動詞の形態について、簡単にまとめておく。

モトゥナ語には、形態的には 3 種類の自動詞<sup>10</sup> と、他動詞が存在するが、今は一番複雑な形態をとる他動詞の構造を示す。それぞれの動詞はさらに、文中の機能によって、文の題目の性／数を標示する「性標示形」GMV (Gender-Marked Verbs)、「性無標示形」NGMV (Non-Gender-Marked Verbs)、そして、「中止形」MEDV (Medial Verbs) の 3 つの形を持つ。

<sup>10</sup> 動作自動詞 (active verbs) 中動自動詞 (middle verbs) 不規則自動詞 (irregular verbs) さらに、形態的には他動詞だが統語的には自動詞として振る舞う非人称動詞 (impersonal verbs) がある。

図2 動詞の形態構造

- (A) 「性標示形」GMV (Gender-Marked Verbs)  
 語幹 {U 人称 A 人称 U/A 数} TAM 性 / 数
- (B) 「性無標示形」NGMV (Non-Gender-Marked Verbs)  
 語幹 {U 人称 A 人称 U/A 数} (否定) TAM
- (C) 「中止形」MED (Medial Verbs)  
 語幹 {U 人称 A 人称 U/A 数} (否定) 態:アスペクト:(異主語)

この動詞構造の中で、短縮化が起きる領域の右端は、語末であると考えられる。3.1 で挙げた、「性標示形」GMV の語末につく、男性 / 中性 / 大複数を表す /-nu/ /-ng/ である。基底形を /-nu/ として、語末でその短縮化が起きていると考えるのである。これに対し、同じ語末に現れる Ci/Cu の形を持つ形態素でも、指小性や双数 / 小複数を表す /-ni/ や、「中止形」MED の語末に来る「動態 / 完了 / 異主語」(DYN:PFV:DS) を表す /-ku/ は、短縮化を起こさない。また、その一つ内側に現れる「習慣過去」(HABPAST) を表す /-ki/ も短縮化を起こさない。

一方、短縮化が適用される範囲の左端は、子音で終わる多音節語幹の動詞で、最後の音節に Ci/Cu を持つ場合である。ただし、すべての動詞語幹で短縮化が起きるわけではなく、この場合は語彙的な制約がある。

もう一つの制限は、A 人称接辞を含む Ci/Cu 音節である。まず、(20b), (20c) で見たように、3A「3 人称行為者」を表す /-u/ が、1U「1 人称被行為者」の /-m/、2U「2 人称被行為者」の /-r/、ないし無標の 3U「3 人称被行為者」を間にはさんだ動詞の語幹の最後の子音と組み合わせさせて、Cu 音節を形成する場合。この場合は、短縮化が随意的になる。また、下の例に見るように、1A「1 人称行為者」を表す /-ut/ との組み合わせで生じる Cu 音節、2A「2 人称行為者」を表す /-i/ との組み合わせで生じる Ci 音節は、決して短縮化を起こさない。

これらの制限の下に、短縮化が、語末から始まり、右から左に向けて義務的に起きる過程であることを、下に示してみよう。まず、(20) に挙げた他動詞 /taapu-/ を例にとる。

- (23) a. *taapu-m-u-h-ni*  
 help-1U-3A-DU:NRPAST-DuPc  
 「彼(ら二人)が私(たち二人)を助けた(題目:二人)」
- b. *taapu-m-u-s-i-ng*  
 help-1U-3A-DU-NRPAST-M  
 「彼(ら二人)が私(たち二人)を助けた(題目:男)」
- c. *taapu-n-s-i-ng*  
 help-1U:3A-DU-NRPAST-M  
 「彼(ら二人)が私(たち二人)を助けた(題目:男)」

(23a) では、双数を表す /-ti/ と「近過去」を表す /-i/ の融合形 /-si/ が、双数の項が題目であることを示す /-ni/ の前で /h/ に短縮化される。(23b), (23c) では、まず男性の /-nu/ が語末で /ng/ に短縮化され、次の /-si/ は /ng/ に続くため短縮化されず、その左隣の /-m-u/ (「1 人称被行為者」+「3 人称行為者」) が短縮化の対象となる。この短縮化は随意的なため、(23b), (23c) の二つの形が可能なのである。

次に、(22) で挙げた他動詞 /pokuk-/ を例にとる。

(24) a. *po'k-∅-u-n-ni*

hide-3U-3A-PCL-RMPAST-DuPc

「彼ら（三人以上）が彼／彼女を隠した（題目：彼ら数人）」

b. *po'k-∅-u-r-u-ng*

hide-3U-3A-PCL-RMPAST-M

「彼ら（三人以上）が彼／彼女を隠した（題目：彼、または彼ら大勢）」

c. *poku'-r-u-ng*

hide:3U:3A-PCL-RMPAST-M

「彼ら（三人以上）が彼／彼女を隠した（題目：彼、または彼ら大勢）」

(24a) では、「大小複数」を表す /-ru/ と「遠過去」を表す /-u/ の融合形 /-ru/ が、小複数の項が題目であることを示す /-ni/ の前で /n/ に短縮化される。(24b), (24c) では、男性ないし大複数が題目であることを表す (/nu/ の短縮形) /-ng/ が語末にあるため、その左の /-ru/ は短縮化されず、そのさらに左隣の /-k-∅-u/（動詞語幹の末子音 + 「3 人称被行為者」 + 「3 人称行為者」）が短縮化の対象となる。この短縮化は随意的なため、二つの形が可能となる。短縮化した場合は (24c)。また、短縮化しなかった場合は、動詞語幹の第 2 音節の /ku/ が義務的に /' / に短縮化され、(24b) になる。

一方、この同じ動詞が、「1 人称行為者」、「2 人称行為者」を取る場合、「1 人称行為者」を表す /-uC/ との組み合わせで生じる Cu 音節、「2 人称行為者」を表す /-i/ との組み合わせで生じる Ci 音節は、決して短縮化を起こさないため、次の例のように、語幹が義務的に短縮化を起こす。

(25) a. *po'k-∅-ut-u-ng*

hide-3U-1A-RMPAST-M

「私が彼／彼女を隠した（題目：私（男） または彼）」

b. *\*poku't-u-ng*

hide:3U:1A-RMPAST-M

「私が彼／彼女を隠した（題目：私（男） または彼）」

(26) a. *po'k-∅-i-t-u-ng*

hide-3U-2A-DU-RMPAST-M

「あなた（たち 2 人）が彼（ら 2 人）を隠した（題目：あなた（男） または彼）」

b. *\*poku'-t-u-ng*

hide:3U:2A-DU-RMPAST-M

「あなた（たち 2 人）が彼（ら 2 人）を隠した（題目：あなた（男） または彼）」

最後に、動作自動詞語幹 /kopir-/ 「歩く」と他動詞語幹 /konin-/ 「建てる」の例を挙げる。これらの動詞の第 2 音節が短縮化されると、/kopir-/ では /pi/ が鼻音音素に代わり、さらにその後の /r/ と同化して /konn-/ の形となる。一方、/konin-/ では、/ni/ が鼻音音素に代わるためこれも /konn-/ の形となる。従って、(27b), (28b) のように、この形は同音異義となる。（なお、(28a) では、基底形は /konin-∅-u/ であるが、動詞語幹末の /n/ が直前の音節の /n/ と異化を起こして失われ、さらにそれに続く /u/ が直前の /i/ と同化した結果、表層的には /konii-/ となる。）

(27) a. *kopi'-ki-ng*  
walk:3SACT-HABPAST-M  
「彼は歩いたものだ」

b. *konn-u-ki-ng*  
walk-3SACT-HABPAST-M  
「彼は歩いたものだ」

(28) a. *konii-ki-ng*  
build:3U:3A-HABPAST-M  
「彼はそれを建てたものだ」

b. *konn-∅-u-ki-ng*  
build-3U-3A-HABPAST-M  
「彼はそれを建てたものだ」

ここで、動詞の変化形で短縮化が起きる要素を、右に位置する接辞からまとめて列挙すると、下のようになる。(男性/中性/大複数を表す /-nu/、分詞を派生する /-wasi/ については、表3の(i), (ii)で挙げたので、ここでは挙げない。)

表4 Ci/Cu ↔ Cc 交替を起こす形態素(2)

(i) 双数を表す /-ti/ と、「近過去」(NRPAST) または「静態/未完了」(STAT:IMPF) を表す /-i/、ないし「遠過去」(RMPAST) を表す /-u/ の組み合わせ。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-ti/ (DU) + /-i/ (NRPAST/STAT:IMPF)	-si	-h	義務的
b	/-ti/ (DU) + /-u/ (RMPAST)	-tu	-'	義務的

(ii) 大小複数を表す /-ru/、またはこの形態素と「遠過去」(RMPAST) /-u/ の組み合わせ。または、この形態素と「近過去」(NRPAST) / 「静態/未完了」(STAT:IMPF) /-i/ との組み合わせ。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-ru/ (PCL) /-ru/ (PCL) + /-u/ (RMPAST)	-ru	-'/_C [-voice] -Nc/_C [+voice]	義務的
b	/-ru/ (PCL) + /-i/ (NRPAST/STAT:IMPF)	-ri	-'/_C [-voice] -Nc/_C [+voice]	義務的

(iii) 動作自動詞または他動詞の「1人称行為者」を表す /-ot/ /-ut/ と、「遠過去」(RMPAST) /-u/ の組み合わせ。または、この形態素と、「近過去」(NRPAST) / 「静態/未完了」(STAT:IMPF) /-i/ との組み合わせ。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-ot/ (1SACT) + /-u/ (RMPAST) /-ut/ (1A) + /-u/ (RMPAST)	-otu -utu	-o' -u'	義務的
b	/-ot/ (1SACT) + /-i/ (NRPAST/STAT:IMPF) /-ut/ (1A) + /-i/ (NRPAST/STAT:IMPF)	-osi -usi	-oh -uh	義務的

表 4 Ci/Cu ↔ Cc 交替を起こす形態素 (2) (続き)

- (iv) 他動詞の「1 人称被行為者」を表す /-m/ または「2 人称被行為者」を表す /-r/ と、  
「3 人称行為者」を表す /-u/ との組み合わせ。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-m/ (1U) + /-u/ (3A)	-mu	-N	随意的
b	/-r/ (2U) + /-u/ (3A)	-ru	-'/__C [-voice] -Nc/__C [+voice]	随意的

- (v) 動作自動詞の語幹末の子音と「3 人称行為者」 /-u/ との組み合わせ。または、  
他動詞の語幹末の子音、無標の「3 人称被行為者」 /-∅/、「3 人称行為者」 /-u/ の組み合わせ。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-k/ + /-u/ (3SACT) /-k/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-ku	-'	随意的
b	/-t/ + /-u/ (3SACT) /-t/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-tu		
c	/-p/ + /-u/ (3SACT) /-p/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-pu	-Nc	随意的
d	/-n/ + /-u/ (3SACT) /-n/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-nu		
e	/-ng/ + /-u/ (3SACT) /-ng/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-ngu		
f	/-r/ (2U) + /-u/ (3A)	-ru	-'/__C [-voice] -Nc/__C [+voice]	随意的
g	/-s/ + /-u/ (3SACT) /-s/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-su	-h	随意的
h	/-h/ + /-u/ (3SACT) /-h/ + /-∅/ (3U) + /-u/ (3A)	-hu		

- (vi) 子音で終わる 2 音節以上の動詞語幹の、末子音前の Ci/Cu 音節。

	基底形	表層形	短縮形	
a	/-ki-/	-ki-	-'-	義務的
	/-ku-/	-ku-		
	/-tu-/	-tu-		
b	/-mu-/	-mu-	-Nc-	義務的
	/-ni-/	-ni-		
	/-nu-/	-nu-		
	/-ngi-/	-ngi-		
	/-ngu-/	-ngu-		
c	/-pi-/ followed by /-r/ /-ri-/ followed by /-n/	-pi-r- -ri-n-	-nn-	義務的
d	/-si-/	-si-	-h-	義務的

(vi) の動詞語幹については、語彙的な制約があり、このような音節を持つ語幹がすべて短縮化を起こすわけではない。また、はじめから、決して Ci/Cu と交替しない Cc を語幹の一部としている動詞もある。これまでに確認できた、Ci/Cu ないし Cc を末子音の前に持つ、2 音節以上のすべての動詞語幹のリストを、補遺に挙げる。

さて、ここで、これまで議論してきた名詞類・動詞の短縮化の過程を要約すると、次のようになる。

(29) 短縮化の過程は、語末より、左に向けて進み、音節境界前の Ci/Cu 音節は対応する Cc へと短縮化される。その対応関係は、下のようである。

	Ci/Cu (基底形)	Cc (短縮形)	短縮化を起こす条件
a	/-tu-/ /-ki-/, /-ku-/	,	/V__\$
b	/mu/, /pi/, /pu/ /ni/, /nu/ /ngi/, /ngu/	Nc	/V__\$
c	/si/, /su/ /hi/, /hu/	h	/V__\$
d	/ri/, /ru/	Nc ,	/V__\$C [+voice] /V__\$C [-voice]

ただし、形態素や語彙によって、短縮化に次の制限がある：

- (i) 指小性 / 双数 / 小複数を表す /-ni/、「習慣過去」(HABPAST) /-ki/、「動態 / 完了 / 異主語」(DYN:PFV:DS) /-ku/ は、短縮化を起こさない。
- (ii) 重複によって形成される Ci/Cu 音節は、短縮化を起こさない。<sup>11</sup>
- (iii) 「1 人称行為者」 /-u/、「2 人称行為者」 /-i/ を含む Ci/Cu 音節は短縮化を起こさない。
- (iv) 「3 人称行為者」 /-u/ を含む Ci/Cu 音節の短縮化は随意的である。
- (v) 動詞語幹の中に含まれる Ci/Cu 音節の短縮化に関しては、語彙的な制限がある。

### 3.3 まとめ

以上、3.1, 3.2 の議論から明らかなように、モトゥナ語における Ci/Cu 音節と Cc との交替を、語末から左に進行する短縮化という、形態音韻的過程として、かなりの程度一般化できる。この場合、短縮化が起きるのは基本的には拘束形態素であって、自立名詞の語末における交替は、この短縮化過程の類推として生じた、限られた現象と考えることができる。

ただ、この形態音韻的過程には、いくつかの制限がある上、動詞の形態素や語幹では、短縮化に付随するさらなる音韻変化まで起こしている ((28a) を参照)。

もう一度、(29) を見てみよう。(29) において (i)–(iv) のような制限がある理由として、ここに挙げた形態素まで短縮化してしまうと意味伝達に支障が生じることが考えられる。特に (iii)–(iv) に関して言えば、項の人称を表す接辞は、モトゥナ語のように主要部標示の傾向の強い言語にあっては重要な要素なので、一般に短縮化を避ける傾向がある、という説明が成立しそうである。これらの音節まで短縮化を許した

<sup>11</sup> (17b) を参照。動詞の場合も、他動詞の二つの項がどちらも小複数ないし大複数の場合、大小複数を表す接辞 /-ru/ の重複が起きる。

場合、(25b), (26b) に見るような同音異義の動詞形が、頻出することになる。<sup>12</sup>

一方、この現象の音韻的な面、特に、基底形となる Ci/Cu 音節の形については、歴史的な変化を考察の対象に入れることによってその多くが説明されるのではないかと思う。

Blevins (2004) は、彼女の提唱する「進化音韻論」という方法論について、こう述べる。

「進化音韻論」は、共時的な音韻パターンについて、歴史的、非目的論的、音声学的な説明を提供する。偶然以上の確率で起きる言語横断的な類似性は、直接の継承か、平行進化の結果であると見なすことができる。非自然的な音韻変化のパターンもまた、( 1 ) に描かれているような<sup>13</sup> 規則的な歴史変化の結果と見なしうる。どちらの場合でも、共時的な音韻パターンの一義的な説明は、歴史的なものである。[...] 音声学的な説明を歴史的な要素に限ることによって、共時的な音韻システムの統一性は、妥協の余地がないものとなる。<sup>14</sup>

Blevins がここで述べるように、共時的な音韻現象のほとんどが歴史的変化に還元できるかどうかについて、私は懐疑的である。「自然音韻変化」と呼ばれるものの方向性が、おおむね歴史的に説明できるという考えには賛成だが、Blevins がここで言及している「非自然的な音韻変化のパターン」まで歴史的と言っているかどうか、疑問が残る。こうしたパターンが生じる歴史的原因と彼女が言及しているもの(注 13 参照)には、類推という言葉で一括できそうな、自然音韻変化を逸脱したさまざまなパターンが分類されている。もしこのような変化も歴史的変化と呼ぶならば、確かに音韻現象は、そのほとんどが歴史的に説明できるということになるが、その場合の歴史性とは、個別言語の共時的構造の特殊性から一応は独立した概念である「自然音韻変化」とは、かなり質が違ったものである。「非自然的な音韻変化のパターン」は、個別言語の共時的な構造、特に超分節的な音韻構造や形態論的な構造に規定されて、おそらくはまったく異なった道筋を辿ることになる。

さて、次節では、Blevins の最初の論点に沿って、モトゥナ語の「短縮化」が、歴史的な自然音韻変化をどの程度反映しているかを、南ブーゲンヴィル語族の諸言語の今手元にあるデータを比較しながら検討してみたい。

<sup>12</sup> モトゥナ語の動詞には、ただでさえ同音異義の形が多い。例えば、次に挙げる、他動詞 /tani-/ 「起こす」の動詞形の例では、接尾辞 /-i/ の基底形として ( ) の中に示した 4 通りの組み合わせが可能なことから、4 通りの読みが生じる。

/tani-∅-i-ng/

wake-3U-2/3A:NRPAST/RMPAST-M

「あなたが彼 / 彼女をさっき起こした。」(/-i/ (2A) + /-i/ (NRPAST))

「彼 / 彼女が彼 / 彼女をさっき起こした。」(/-u/ (3A) + /-i/ (NRPAST))

「あなたが彼 / 彼女をずっと前に起こした。」(/-i/ (2A) + /-u/ (RMPAST))

「彼 / 彼女が彼 / 彼女をずっと前に起こした。」(/-u/ (3A) + /-u/ (RMPAST))

<sup>13</sup> Blevins (2004:67) 参照。Blevins はここで、analogy, rule inversion, rule telescoping, accidental convergence の 4 つの変化のパターンを挙げている。

<sup>14</sup> 大西訳。原文は以下の通り。

“Evolutionary phonology proposes historical, non-teleological, phonetic explanations for synchronic sound patterns. Cross-linguistic similarities which occur with greater than chance frequency are viewed as the result of direct inheritance or parallel evolution. Unnatural sound change patterns can also be viewed as the result of regular historical changes like those sketched in (1). In either case, the primary explanation for a synchronic sound pattern is historical [...] By limiting phonetic explanation to the diachronic component, the integrity of synchronic phonological systems remains uncompromised.” (Blevins 2004:81)



## 4 Cc の歴史的派生の検討

この節では、3 節で扱った形態音韻的な現象の音韻面を、比較言語学的視点から検討してみる。まず 4.1 において、モトゥナ語における 3 種類の Cc の起源を、基礎語彙の同源語の比較から跡づけることを試みる。続けて、4.2 において、3 節で扱った形態素のいくつかの起源を跡づけることを試みる。

ここでは、次のデータを用いる。

ナーシオイ語キエタ方言	大西 (フィールドデータ)、Hurd (2003)
ナゴヴィシ・シベ語トベラキ方言	稲垣 (2010, 私信)
バイツィ語	大西 (フィールドデータ)
モトゥナ語中央方言	大西 (フィールドデータ)、Onishi (1995)
ブイン語中央方言	Laycock (2003)

ナーシオイ語キエタ方言のデータについては、大西のフィールドデータをもとに、Hurd (2003) で随時確認をとった。以下にあげたデータに関しては、この二つにおいて、すべて一致している。また、ナゴヴィシ・シベ語トベラキ方言に関しては、これに近い方言であるモシノ方言についての大西のフィールドデータも参照した。

以下の表で、空欄の部分は、当該言語におけるデータがまだ得られていないことを、また ( ) で示された形態素は、同源語ではないことを表す。バイツィ語については、データが限られているので、特にデータがない場合は欄そのものを省略している場合もある。

なお、南ブーゲンヴィル語族の祖語である原 SB の再構形は、ナーシオイ語、ナゴヴィシ・シベ語の 2 言語と、モトゥナ語またはブイン語のうち少なくとも一つの言語に、同源語が得られた場合にのみ、立てている。ナーシオイ語が多くの場合祖形に最も近い形を残していること、ナゴヴィシ・シベ語はナーシオイ語からさらに歴史的に発展した形を反映していること、モトゥナ語の同源語はブイン語またはナゴヴィシ・シベ語のそれから発展した形を示しており、しかもブイン語に同源語がある場合はモトゥナ語にきわめて近い形である場合が多いこと、などがその理由である。ただ、そのようにして再構された祖形でも、不確定な要素 (特に母音の長短や声門閉鎖音の有無) がある場合がある。それらについては、( ) で示したり、‘?’ を付したりした。

### 4.1 モトゥナ語における Cc の起源

#### 4.1.1 /h/

Cc としての /h/ の起源については、ほぼ確実に推定できる。ここでは、モトゥナ語の基礎語彙のいくつかにおいて、音節境界前に現れる /h/ についての比較データを挙げて、可能なものについて再構を試みる。

表 5 のナーシオイ語、ブイン語における “-ti” は、音韻表記で、実際の発音は、前者が [si]、後者が [(t)si] である。(この 2 言語において、/s/ は独立の音素としては存在しない。) ナゴヴィシ・シベ語では、[s] を独立音素として扱うべきかどうか、微妙である (稲垣私信)。限られた語彙において、/a/, /o/ の前に [t] と [s] が分布しているので、いちおう /s/ を立てた。この音素は、[i] の前では常に [j] で、しかも語末における [i] は無声化している。一方、バイツィ語では /s/ が音素として存在し、表 5 (e) のように、モトゥナ語のような /si/~/h/ の対応を示す例もある。モトゥナ語の Cc としての /h/ は、従って、(30) のような母音消失と中和の結果、生まれたものと考えられる。

表 5 /h/の比較データ

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	パイツイ	モトゥナ	ブイン
a	畑		(mintoong)	kasi'		koh	koti
b	竹	*beti	bei	busi		pih	piti
c	虱	*panti'	panti'	pasi'		hoh	oti
d	長い	*itika	itikaa	isikalou		ihkita, ihkaato	itigou
e	義姉妹	*-maati(')	-maati'	-maasi	-(o)mah/-masi	-(o)mah/-masi	-mati
f	埋葬する	*ka(a)te(')-	kate'-			kaahy/w-~ kaasiy/w-	kaati-(P)
g	分詞形成語尾		NA	-wasi		-wah	-wati

- (30) a. \*/ti/ [tsi ~ si] > \*/ti/ [s(i)~ ʃ(i)] / V\_\_ \$  
b. \*/si/ [s ~ ʃ] > /h/ [h] / V\_\_ \$

モトゥナ語においてはこの変化はほぼ完了している。<sup>15</sup> この歴史的変化は、表 5 (e) の /-(o)mah/ ~ /-masi/ や、(g) の /-wah/ ~ /-wasi/ の場合、直接、共時的な短縮化に反映されている。

#### 4.1.2 /ʔ/

/ʔ/ は、ナーシオイ語では、語中と語末において音素として現れ、そのうち語末のものはナゴヴィシ・シベ語にもある程度その反映が見られるが、モトゥナ語にはまったく反映されていない。(表 6 の、(i)(a)「涙」や、(ii)(a)「昨日」を参照。) 一方、モトゥナ語では、\*/ru/, \*/ri/, \*/ku/, \*/ki/, \*/tu/ から、新たに Cc としての /ʔ/ が成立したのが見える。

表 6 /ʔ/の比較データ

(i) \*/ru/, \*/ri/

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
a	涙	*ta'ru(')	ta'ru	talu'	to'	toru(pi)
b	首	*kuru	kuru	kulu	ku'	ou
c	心臓		murukeu		mu'king	morugumoi
d	古い	*urika(a)	urikaa	ulikala	u'kisa	uni-
e	はえ	*sirimpaa	sirimpau'	siligaa	singnga	timuka

(ii) \*/ki/, \*/ku/, \*/tu/

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
a	昨日	*ke'maaki'	ke'maaki'	kemaaki	kinaa'	
b	トカゲ	*mairauke'	mairobe'	mailaaki'	meera'	maurugu
c	女	*manikuma	manikuma	manikumanaa	moni'mo	

<sup>15</sup> アウストロネシア諸語からの借用語である /hakaasi/ 「カヌー」(< pakaasi (POC) ) に /si/ を残しているのは、この借用が SB 諸語の歴史的変化よりも後であることを示しているのであろうか。その一方で、同じく借用が期待される「犬」の意のモトゥナ語の単語は /mahkata/ で、アウストロネシア語との関係がはっきりしない。ナーシオイ語の /mosi'/、ナゴヴィシ・シベの /mosika/ と比較すると、/si/ > /h/ の変化を示しているようであるが、母音の /o/, /a/ の対応は不規則である。

表 6 /ʔ/の比較データ (続き)

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
d	叫ぶ	*boku-	boku-	woku-	pukuy/w-~pu'y/w-	puku-
e	隠す	*baku'-	baku'-	waku'-	pokuk~po'kuk-	
f	始まる / 始める		tutung-		tutun-~tu'n-	turo-g/d

以上の例から分かるように、モトゥナ語の Cc /ʔ/ は、次のような母音消失、中和の結果生じたものと想定される。

- (31) a. \*/ri/, \*/ru/ > \*/r/ / V\_\_ \$  
           \*/ki/, \*/ku/ > \*/k/ / V\_\_ \$  
           \*/tu/ > \*/t/ / V\_\_ \$  
       b. \*/r/, \*/k/, \*/t/ > /ʔ/ / V\_\_ \$

このうち \*/ru/, \*/ri/, \*/ki/ に対応する /ʔ/ については、語末、または無声子音が後続しているという条件のものしか見出されていないが、\*/ku/, \*/tu/ に対応する /ʔ/ の場合は、後に鼻音が来る場合にも見出される。もちろん、これだけでは、モトゥナ語動詞の共時的な短縮化において、\*/ru/, \*/ri/ が、無声子音が後続している時は /ʔ/ に代わり、有声子音が後続する場合は /Nc/ に代わる、という条件が、歴史的起源を持つかどうか、明らかではない。ただし、上の例のうち、(i)(e)「はえ」の /singnga/ が、ブインの /timuka/ ではなくナゴヴィシ・シベの /siligaa/ に由来するとすれば、この条件をみたすことになる。<sup>16</sup> この仮定が正しければ、(31b) を修正して、次のような変化を想定しなければならない。

- (31) b'. \*/k/, \*/t/ > /ʔ/ / V\_\_ \$  
           \*/r/ > /Nc/ / V\_\_ \$C [+voice]  
               > /ʔ/ / V\_\_ \$C [-voice]

#### 4.1.3 /N/

ナーシオイ語、ナゴヴィシ・シベ語、ブイン語には、語頭に立ついわゆる成節的鼻音と、同調音点の鼻音や破裂音との連続が存在する。原 SB にもおそらくあったこれらの成節的鼻音と破裂音の連続は、ナーシオイ語には特によく保たれているが、モトゥナ語においては、これらの連続は、すべて単独の鼻音ないし破裂音に変化した。

- (32) \*/Mm/ > /um/  
       \*/Mp/ > /up/  
       \*/Nt/ > /t/ (before \*/o/), /n/ (Elsewhere)  
       \*/Nd/ > /r/ [r~d] (before \*/o/), /n/ (Elsewhere)  
       \*/NGk/ > /ng/

<sup>16</sup> さらに、ナーシオイ語動詞語幹の /-ri/ で終わるものに、モトゥナ語の語幹交替で /-nn/ に対応するものがある。「寒くなる」 /kamaari-/ (Naasioi) ↔ /kamarin/~kamann-/ (Motuna)、「買う」 /boori-/ (Naasioi) ↔ /puuri/~puunn-/ (Motuna)。ただ、モトゥナ語の動詞語幹末の /-n/ の由来は不明である。

表 7 語頭の成節的鼻音と破裂音の連続の比較データ

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	バイツィ	モトゥナ	ブイン
a	私の父	*Mma'	Mma'	Mma'	moomoo	umoka, moomoo	moka
b	弓	*Mpaa(ng)	Mpaang	baa		upa	puara
c	私の年下の兄弟姉妹	*Ntarama-	Ntarama-	inalama-	narama-	naramo-	roromo-
d	水	*Ntong	Ntong	buu'		tuu	tuu
e	私の子	*Nduri(ng)	Nnuring	inuli	nuri	nuri	rung
f	耳	*Ndome'	dome'	long'		rung	nume
g	私の	*NG-ka-	NG-ka-	NGnga-	nga-	ngo-	NG-ko-

また、語中における \*/mp/ の組み合わせは、多くの場合、モトゥナ語の /p/ に、また \*/ngk/ はモトゥナ語の /ng/ に対応する。

表 8 mp, ngk の比較データ

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	バイツィ	モトゥナ	ブイン
a	父の姉妹	*-kaampo	-kaampo	-kaabo	-kamo	-kapu	-gagu
b	異性の兄弟 / 姉妹の子	*-mpu(ru)	-mpu(ru')	-bu(lu)	-(a)βu~-(a)m	-(o)pu~Nc	-(a)gu
c	孫	*-dompe(ng)	-dompeng	-lobe	-me	-(o)pi	-u/oge
d	老婦	*pangka	pangka-ni	pagaa'		hanga-	(maire)

表 8 の (b) に見るように、モトゥナ語の親族名称や動词语幹において、/pu/, /pi/ が /' / ではなく /Nc/ と交替するのは、それが、原 SB の \*/mp/ の閉鎖音 \*/p/ と鼻音 \*/m/ の両方を反映しているからである。バイツィ語の同源語では、/βu/, /βi/ と /m/ が交替する。

一般に、モトゥナ語の Nc には、下の例にあるように、原 SB における \*m(p)u, \*me の組み合わせに由来するものが多い。

	語義	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	バイツィ	モトゥナ	ブイン
a	皮	*kampu	(dopa')	kabu		kang	kagu
b	耳	*ndome	dome'	long		rung	nume
c	蚊	*taamuka	muitaka	taangka		taangka	taamuka
d	青		(kankong)	mumuleng		munninu	mumurerup-

\*/me/ の場合は、(33a') のような、高母音化の過程があったと思われる。

- (33) a. \*/mpu/ > \*/mu/ [m(u)] / V\_\_ \$  
a' \*/me/ > \*/mi/ [m(i)] / V\_\_ \$  
b. \*/mu/, \*/mi/ [m] > /Nc/ / V\_\_ \$

この他にも、モトゥナ語の Cc の由来として、4.1.2 で述べたように、おそらく原 SB における有声子音の前の \*/ru/, \*/ri/, \*/ni/ <sup>17</sup> などがあるのではないかと思うが、まだこれを証明するのに十分なデータが得られていない。

## 4.2 モトゥナ語における拘束形態素の起源

### 4.2.1 「男性 / 中性 / 大複数」 /-nu/

モトゥナ語の /-nu/ は、「男性 / 中性 / 大複数」を表す接辞として、所有代名詞の語尾の被所有者との一致、名詞句内修飾要素の中核名詞との一致、性標示形動詞語尾の文の題目との一致など、広い文法的機能を持つ。また、親族名称のパラダイムの中では、「夫」の語幹や、「異性の兄弟」や「弟」等の語彙の男性を表す語尾も、同じ形態である。ここでは、こうした異なった環境における /-nu/ が、他の言語のどのような形態素に対応するかを比較してみる。下に見るように、男性 / 中性と大複数とでは、モトゥナ語とパイツィ語以外の言語では接辞の形が異なる。

表 9 「男性 / 中性」

	意味 / 機能	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	パイツィ	モトゥナ	ブイン
a	近称	a-ung	o-o	a-n	o-ng	(a-ko)
b	動詞節の名詞化語尾	-ung			-ng	-ru, -nu /i, n _
c	所有 / 不定語尾	-rung	-ng	-n	-ng	NA
d	夫	-'ung	-ng	-n	-ng	-ru
e	年下のきょうだい	-'nung	-ng	-n	-ng	-ru

表 10 「大複数」

	意味 / 機能	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	パイツィ	モトゥナ	ブイン
a	近称	a-ing	a-woo	a-n	o-ng	(a-ko)
b	動詞節の名詞化語尾	-ing			-ng	-ro-go, -no-go /i, n _
c	所有 / 不定語尾	-ing	-ng	-n	-ng	-ma

「男性 / 中性」の接辞は、/-ru/, /-nu/ がナーシオイ語やブイン語に出ていることから見て、ここでは \*/-ndu(ng)/ と再構する。(\*/Ndu/ はモトゥナ語の /nu/ に対応する。4.1.3 の表 7 (e) の、モトゥナ語 /nuring/ 「私の息子」の再構形 \*/Nduring/ に準じる。) ナーシオイ語の接辞末の /-ng/ は後代に加えられた可能性がある (4.2.2 を参照)。

「大複数」を表す接辞の再構については、十分なデータがないので、今は保留にしておく。

### 4.2.2 「近過去」 / 「静態 / 未完了」 /-i/ 「遠過去」 /-u/

「近過去」または「静態 / 未完了」の \*/-i/ 「遠過去」の \*/-u/ の再構に関しては、特に問題はないのではないかと思う (表 11)。ナーシオイ語の接辞末の /-ng/, /-nung/ は、直接法の語尾として、おそらく後から加えられたものである。

<sup>17</sup> ナーシオイ語動詞語幹の /-ni'/ で終わるものに、モトゥナ語の語幹交替で /-nn/ に対応するものがある。「建てる」/kani'-/ (Naasioi) ↔ /konir/~/konn-/ (Motuna)。モトゥナ語の動詞語幹末の /-r/ の由来は不明である。また、\*/ri/, \*/ru/ については、注 16 を参照。

表 11 「近過去」 / 「静態 / 未完了」, 「遠過去」

	意味 / 機能	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
a	近過去	*-i	-i-ng	-i	-i-Gender	-i
	静態 / 未完了相		-i		-i	
b	遠過去	*-u	-u'-nung	-u	-u-Gender	-u

#### 4.2.3 「双数」 /-ti/、 「大小複数」 /-ru/

表 12 「双数」, 「大小複数」

	意味 / 機能	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
a	双数	*-re(t)	-(r)e(t)	-re	-ti (-si, -h)	-re~-ri
b	大小複数	*-ndi(nd)	-(r)i(r)	-ri	-ru (-', -n)	-ru~-ng

モトゥナ語の双数接辞 /-ti/ の初頭子音 /t/ の起源が不明である。ナーシオイ、ナゴヴィシ・シベ、ブインの形からは、\*/-re(t)/ が再構される。同様に、モトゥナ語の大小複数接辞 /-ru/ の中核母音 /u/ の起源が不明である。ナーシオイ、ナゴヴィシ・シベ、ブインの形からは、\*/-ndi(nd)/ が再構される。

#### 4.2.4 動詞の人称接辞

他動詞の被行為者 (U) と行為者 (A) の接辞を比較する。

表 13 動詞の人称接辞

	意味 / 機能	原 SB	ナーシオイ	ナゴヴィシ・シベ	モトゥナ	ブイン
a	1 人称被行為者 (1U)	*-m	-m		-m	-m
b	2 人称被行為者 (2U)	*-r	-r		-r	-r
c	3 人称被行為者 (3U)	*-∅	-∅		-∅	-∅
d	1 人称行為者 (1A)	*-a(mp, t)	-a(mp, t)		-u(mp, t)	-o(mp, t)
e	2 人称行為者 (2A)	*-e	-e		-i	-e
f	3 人称行為者 (3A)	*-u	-u		-u	-u

上に見るように、行為者を示す母音 (で始まる) 接辞は、原 SB の低段母音や中段母音が高母音化を起こした結果、モトゥナ語において高段母音に反映されるが、被行為者を示す子音接辞は、原 SB と同形である。

## 5 結論

以上、本論では、モトゥナ語の Ci/Cu 音節と Cc との交替現象を、共時的観点と通時的観点の両方から検討してみた。以上の検討から言えることを下にまとめてみたい。

- ( 1 ) この形態音韻的現象は、共時的には、モトゥナ語の音節構造とモーラ構造の特徴、および、拘束形態素（とりわけ親族名称と動詞）の膠着的な多音節構造に依存している。CV 音節が連続する長い親族名称や動詞形を発音する場合、同じパターンで繰り返し現れる、頻度の高い特定の形態素が形成する Ci/Cu 音節が、弱化と中和によってモーラ子音に短縮化されるのは、自然の成り行きと思われる。
- ( 2 ) その場合、形態素のうち特に重要な要素、たとえば動詞の項の人称標示などの短縮化には、一定のブロックがかかる。
- ( 3 ) 多音節動詞語幹の場合、最後の音節が短縮化されるされないの区別がなぜ生じたかはよくわからない。使用頻度と関係があるのではないか、というのが一つの仮説である。確かなのは、語幹が名詞類から派生したタイプの語幹は、決して短縮化されないということである。（補遺のデータ参照。）
- ( 4 ) この短縮化の音韻的な面は、モトゥナ語にこれらのモーラ子音が形成された歴史的過程をそのまま反映している。多くの場合、短縮化が起きる形態素の基底形は、原 SB にまで遡る。
- ( 5 ) 自立名詞で、語尾に交替が起きる例は、おそらく、拘束形態素のこのような短縮化の類推によって生じたものと思われる。これらの名詞の Ci/Cu 形は、歴史的に遡ることはできない。ただ、/h/ が /si/ と交替することについては、これが基本的なパターンであり、また歴史的過程をたどっていることから理解できるが、/ʔ/ と /tu/、/Nc/ と /nu/ の交替については、なぜこのような類推をたどるのか、今のところ説得的な理由が見当たらない。<sup>18</sup>

( 3 ) ( 4 ) については、まだ十分なデータがあるとは言えない。周辺言語のより詳細なデータを得、比較研究を進めることによって、はっきりした姿を描くことを今後の課題としたい。

## 本文で用いた略号

略号	英語	日本語
A	Actor	行為者
C	Consonant	子音
Cc	Coda consonant	コーダ子音
CL	Classifier	類別詞
Co	Onset consonant	音節初頭子音
COMIT	Comitative case	共格
DIST	Distal demonstrative	遠称指示詞
DuPc	Dual-Paucal number (in gender paradigm)	双数 / 小複数
DS	Different Subject	異主語
DYN	Dynamic verb	動態動詞
DU	dual number	双数
EXC	exclusive	除外
F	Feminine gender	女性
GMV	Gender-marked verb	性標示形
HABPAST	Habitual Past ATM	習慣過去
INC	inclusive	包括

<sup>18</sup> 同じ調音タイプの子音の中では、舌頂 (coronal) の位置にあるものが音節初頭子音としては最も無標である、というような類型的な議論が成り立つかどうか、課題の一つである。

INST	Instrumental case	具格
IPFV	Imperfective aspect	未完了相
KINPOSS	Kin Possessor	親族所有者
L	Local gender	場所性
LINK	Linker	連結辞
LOC	Locative case	所格
M	Masculine gender	男性
MED	Medial verb	中止形
N	Nasal	鼻音
Nc	Coda nasal	コード鼻音
NGMV	Non-gender-marked verb	性無標示形
NOM	Nominative case	名前格
NSG	non-singular number	非単数
NRPAST	Near Past ATM	近過去
PC	paucal number	小複数
PCL	paucal or plural number	大小複数
PFV	Perfective aspect	完了相
PL	plural number	大複数
POSS	Possessor/Possessive pronoun	所有者 / 所有代名詞
PROX	Proximal demonstrative	近称指示詞
PTCP	Participle	分詞
REDUP	Reduplication	重複
RMPAST	Remote Past ATM	遠過去
S	intransitive subject	自動詞主語
SACT	S of active intransitive verb	動作自動詞の主語
SG	singular number	単数
SIRR	S of irregular intransitive verb	不規則自動詞の主語
SMID	S of middle intransitive verb	中動自動詞の主語
SS	Same Subject	同主語
STAT	Stative verb	静態動詞
U	Undergoer	被行為者
1	1st person	1 人称
2	2nd person	2 人称
3	3rd person	3 人称

## 補遺

表 I 短縮化が起きる動詞語幹

(A) 短縮形 /' (基底形は、/kiC-/、/kuC-/、/tuC-/)

(i) 基底形/kiC-/

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/hahakiy-/~/hahakuy-/	haha'y-	'to work on'	transitive
/hakik-/	ha'k-	'to decorate'	transitive
/hokir-/	ho'r-	'to cut/break'	transitive
/kanakiy-/	kana'y-	'to eat as protein food'	transitive
/pakir-/	pa'r-	'to shake/swing'	transitive



表 I 短縮化が起きる動詞語幹 (続き)

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/raakir-/	raa'r-	'to bring upwards'	transitive
/rakik-/~/rakuk-/	ra'k-	'to bark (a tree)'	transitive
/rikir-/	ri'r-	'to untie'	transitive
/rokit-/	ro't-	'to take down'	transitive
/sukik-/	su'k-	'to make sth/sb jump'	transitive
/tuukik-/	tuu'k-	'to make sth/sb crawl'	transitive
/uukiy-/	uu'y-	'to ask sb (about sth)'	transitive

## (ii) 基底形/kuC-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/kukuk-/	ku'k-	'to dig'	transitive
/pokuk-/	po'k-	'to hide'	transitive
/pukuk-/	pu'k-	'to prevent sb from sth'	transitive
/pukuy-/	pu'y-	'to shout'	SACT
/rukuk-/	ru'k-	'to cook by boiling'	transitive
/ukuy-/	u'y-	'to pick from ground'	transitive

## (iii) 基底形/tuC-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/hotun-/	ho'n-	'to kindle (fire)'	transitive
/rutun-/	ru'n-	'to ring/beat'	transitive
/totuk-/	to'k-	'to hold/touch'	transitive
/tutun-/	tu'n-	'to begin'	transitive

## (B) 短縮形 h (基底形は常に/siC-/)

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/asik-/	ahk-	'to tell sb to go'	transitive
/hisik-/	hihk-	'to break (solid food) into halves'	transitive
/hisit-/	hiht-	'to turn the skin of sb's penis'	transitive
/hosik-/	hohk-	'to pick (fruit)'	transitive
/isir-/	ihr-	'to replace'	transitive
/kaasiy-/	kaahy-	'to cremate'	transitive
/kokisik-/	kokiht-	'to season with salt'	transitive
/kusik-/	kuhk-	'to put down'	transitive
/nisik-/	nihk-	'to hit'	transitive
/nuposik-/	nopohk-	'to get puffed up' 'to become pregnant'	impersonal SACT
/otosik-/	otohk-	'to play a trick on'	transitive
/pisik-/	pihk-	'to look for'	transitive
/peesik-/	peehk-	'to come upon'	transitive
/resin-/	rehn-	'to sway/bend'	SACT
/rusi=rusiy-/	ruh=ruhy-	'to comb sb's hair'	transitive
/rusik-/	ruhk-	'to submerge'	transitive
/tusir-/	tuhr-	'to cut surface of'	transitive
/waasiisik-/	waasiht-	'to tell (story)'	transitive

表 I 短縮化が起きる動詞語幹 (続き)

(C) 短縮形 N (基底形は、/niC-/、/nuC-/、/ngin-/、/ngung-/、/mung-/、/pir-/、/rin-/)

(i) 基底形/niC-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/honik-/	hongk-	‘to hang’	transitive
/hunik-/	hungk-	‘to push in’	transitive
/konin-/	konn-	‘to build’	transitive
/monit-/	mont-	‘to stamp on’	transitive
/nuunin-/	nuunn-	‘to kiss’	transitive
/nununit-/	nununt-	‘to press’	transitive
/onin-/	onn-	‘to tie’	transitive
/raanik-/	raangk-	‘to rub/wipe’	transitive
/renin-/	renn-	‘to shake and carry’	transitive
/ronin-/	ronn-	‘to make sb tumble down’	transitive
/runin-/	runn-	‘to cook under charcoal’	transitive
/ruunin-/	ruunn-	‘to lower’	transitive
/tonin-/	tonn-	‘to spread’	transitive
/tutunik-/	tutungk-	‘to feel wet and cold’	impersonal

(ii) 基底形/nuC-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/hinung-/	hingng-	‘to break (mountain)’	transitive
/kinung-/	kingng-	‘to think of’	transitive
/miinut-/	miint-	‘to massage’	transitive
/minuk-/	mingk-	‘to play’	transitive
/ninut-/	nint-	‘to make (waves)’	transitive
/pokono=minung-/	pokono=mingng-	‘to name after’	transitive
/rinuk-/	ringk-	‘to pass by’	SACT/transitive

(iii) 基底形/ngin-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/tongin-/	tonn-	‘to cut (thread)’	transitive

(iv) 基底形/mung-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/tomung-/	tongng-	‘to pound’	transitive

(v) 基底形/pir-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/haapir-/	haann-	‘to dawn’	SACT
/kopir-/	konn-	‘to walk’	SACT

(vi) 基底形/rin-/:

基底形	短縮形	意味	動詞のタイプ
/itarin-/	itann-	‘to disallow’	transitive
/kamarin-/	kamann-	‘to feel cold’	impersonal
/kokirin-/	kokinn-	‘to bite’	transitive
/puurin-/	puunn-	‘to buy/pay’	transitive

表 II Ci/Cu の短縮化が起きない動詞語幹

(A')

(i') /kiC-/で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
tokis-	'to cut, sever'	transitive

(ii') /kuC-/で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
hokut-	'to cross over'	transitive
kukuh-	'to weed'	transitive
rokut-	'to bury'	transitive
tokur-	'to harvest taro'	transitive
raku=rakuk-	'to feel/be light in weight'	impersonal (nominal)
topukuk-	'to feel/be wet'	impersonal (nominal)
okur-	'to be tired'	active intr.

(iii') /tuC-/で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
katuk-	'to trim'	transitive
motuk-	'to spare'	transitive
potung-	'to call sb's name'	transitive
riituh-	'to fix'	transitive
neetuk-	'to ripen'	impersonal (nominal)
hotuk-	'to stick on'	active intr.

/ruC-/、/riC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
hirit-	'to pull apart'	transitive
eerih-	'to hide'	transitive
irit-	'to tear'	transitive
rorih-	'to forget'	transitive
torik-	'to count'	transitive
korih-	'to have lots of fruit'	active intr.
maarit-	'to have a rest'	active intr. (nominal)
morik-	'to return home'	active intr.
urik-	'to go up'	active intr.
karuk-	'to tie'	transitive
kurut-	'to cover, bury'	transitive
paaruk-	'to smoke'	transitive (nominal)
pipiruh-	'to open'	transitive
piruk-	'to overturn'	transitive
poruk-	'to put on top'	transitive
ooruh-	'to be afraid'	impersonal
muruk-	'to turn round and see'	active intr.

表 II Ci/Cu の短縮化が起きない動詞語幹 (続き)

(B')

/hiC-/ , /huC-/ , and /suC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
kuhir-	'to cut (tree)'	transitive
huhut-	'to deceive'	transitive (nominal)
kahuk-	'to baricade'	transitive
kehur-	'to write'	transitive
tuhut-	'to pierce through'	transitive
pohur-	'to go very far'	active intr.
urisi-	'to leave'	transitive
pisuk-	'to paddle'	transitive

(C')

(i') /niC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
hinik-	'to chop'	transitive
iinih-	'to move out of way'	transitive
kaaning-	'to bend'	transitive
pisiining-	'to ignore'	transitive
sinih-	'to cut/split into fine strips'	transitive
tinir-	'to move from one place to another'	transitive
manik-	'to hunt possums'	transitive (nominal)
ponit-	'to go on top'	middle

(ii') /nuC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
honung-	'to feel by touch'	transitive
aanut-	'to put in the water to be carried away'	transitive
tunup-	'to straighten'	transitive
hunuk-	'to increase'	middle

(iii') /ngiC-/ and /nguC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
hingir-	'to dig'	transitive
pongir-	'to break (long obj)'	transitive
ronguh-	'to finish by eating'	transitive
tanguh-	'to slap, clap'	transitive

(iv') /miC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
komik-	'to finish'	transitive

(v') /puC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
tupur-	'to burn in the garden'	transitive (nominal)
sapuk-	'to chop, break'	transitive
maapuk-	'to fill'	transitive

表 II Ci/Cu の短縮化が起きない動詞語幹 (続き)

(vi') /riC-/ and /ruC-/ で終わる語幹:

語幹	意味	動詞のタイプ
hurir-	'to blow'	transitive
pirir-	'to scatter'	transitive
aaring-	'to jump over, enter'	transitive
haring-	'to feel sad'	impersonal (nominal)
haarung-	'to feel pity on'	transitive (nominal)

表 III Cc が Ci/Cu と交替しない動詞語幹

(A)

/ 'C- /で終わる語幹	意味	動詞のタイプ
ha'h-	'to throw (sth) towards'	transitive
ku't-	'to take off clothes'	transitive
mu'h-	'to be unable'	transitive
kunu'h-	'to dip in water'	transitive
sii'h-	'to put oil on'	transitive
naa'h-	'to be lazy'	impersonal (nominal)
ru'h-	'(plant) to grow, (the sun) to rise'	Impersonal
mu'=mu'h-	'to be unable to say through'	middle
mumu'y-	'to be quiet'	middle
mu'y-	'to prevent self to proceed'	middle
ne'y-	'to sit'	middle
ku't-	'to be like'	active intr.
ni'r-	'to be surprised'	active intr.
tuu'k-	'to slide on the ground'	middle

(B)

/hC- /で終わる語幹	意味	動詞のタイプ
tuht-	'to thread (with a needle)'	transitive
hahk-	'to throw over towards'	transitive
kihy-	'to peel, husk'	transitive
mihy-	'to move/jump vigorously'	middle
muh=muhy-	'to whisper'	middle
ruriht-	'to slip'	middle

(C)

/NC- /で終わる語幹	意味	動詞のタイプ
mimint-	'to massage'	transitive
siimp-	'to sweep'	transitive (nominal)
nangk-	'to hit, bash'	transitive
nin=ningng-	'to shake'	transitive
nunn-	'to swallow'	transitive
paatungk-	'to carry on a pole'	transitive (nominal)
pinann-, pinangng-	'to coil over'	transitive
rurinn-	'to slide'	middle

## 参照文献

- BLEVINS, JULIETTE (2004) *Evolutionary Phonology: The Emergence of Sound Patterns*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DUNN, MICHAEL, GER P. REESINK, & ANGELA TERRILL (2002) The East Papuan languages: A preliminary typological appraisal. *Oceanic Linguistics* 41 (2). 28–62.
- EVANS, BETHWYN (2010) Beyond pronouns: Further evidence for South Bougainville. In *Discovering History through Language: Papers in honour of Malcolm Ross*, ed. by Bethwyn Evans, volume 605 of *Pacific Linguistics*, chapter 3. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- HURD, CONRAD (1977) Nasioi projectives. *Oceanic Linguistics* 16 (2). 111–178.
- (2003) Naasioi dictionary. Unpublished manuscript.
- , & PHYLLIS HURD (1966) *Nasioi Language Course*. Port Moresby: Department of Information and Extension Services.
- , & PHYLLIS HURD (1970) Nasioi verbs. *Oceanic Linguistics* 9. 37–78. Revised in 2009.
- LAYCOCK, DONALD C. (ONISHI, MASAYUKI ed.) (2003) *A Dictionary of Buin: A Language of Bougainville*, volume 537 of *Pacific Linguistics*. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- OFFICE, NATIONAL STATISTICAL (2002) *Census Unit Register: North Solomons Province*. Port Moresby: National Statistical Province.
- ONISHI, MASAYUKI (1995) *A Grammar of Motuna (Bougainville, Papua New Guinea)*. Australian National University dissertation.
- ROSS, MALCOLM (2001) Is there an East Papuan phylum? Evidence from pronouns. In *The Boy from Bundaberg: Studies in Melanesian Linguistics in honour of Tom Dutton*, ed. by Andrew Pawley, Malcolm Ross, & Darrell Tryon, volume 514 of *Pacific Linguistics*, 301–321. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- 稲垣和也 (2010) 「ナゴヴィシ・シベ語の類別詞」大西正幸・稲垣和也編 『地球研言語記述論集 2』 京都：総合地球環境学研究所.